

奇立ちが募る。

いつだって酒を飲んで一晩寝れば、大概の嫌なことは忘れられた。喧嘩で誰かに惨敗しても、ここまで嫌な気分になったことなど一度もなかった。

早朝、カブラは無言で狩りの装備を整える。軽口や喧嘩の絶えない三人であったはずなのに、カアシュもブルックも一言も口を聞かなかった。

理由は、昨晚のブルックの話である。

早朝までは帰ってこないと思っていたブルックが、女連れで戻ってくるなり、千宏がハンスと共にテペウの宿にいる事を話したのだ。

「チヒロが、テペウのところに……？」

信じられないと言うように問い返したカアシュの言葉を、カブラは凍りついたまま聞いていた。何かを言いたかったのは間違いない。だがカブラは声を発することも出来なくて、代わりにカアシュが珍しく怒鳴り散らしていた。

「どういふことだよブルック！ なんでチヒロが……だって、あんなに怯えてたじゃねえか！」

「さあな。知らねえよ。テペウがチヒロを連れてって、それで気に入ったか何かしたんだろ」

そっけなく答えたブルックの言葉を補うように、カキシヤが面白がるように言う。

「相当入れ込んでたわよお？ だって名前前で呼んでたもの。あたし、テペウに名前覚えてもらうの結構大変だったんだから」

「名前を　？」

言って、カブラは目を見開く。

自分でも驚くような、ひどく静かな声だった。そうよお、と笑ったカキシヤの唇が色っぽく孤を描く。

「あんただって、テペウが名前を覚えることの意味くらい知ってるでしょ？ 言ってる内容は悪い奴みたいだったけど、まあ元々、テペウは女に優しいから」

本当に可愛がってもらえるんじゃない？ と楽しみに笑い、カキシヤはブルックの膝に腰を下ろして尻尾を脚に絡みつかせた。

「冗談じゃねえ！ 取り返しに行こうカブラ！ ハンスがついてたって安心なんかできねえよ！ テペウは魔法だって使えるんだ！ いざと言う時ハンス一人じゃチヒロのことを守れねえ！」

「落ち着けカアシュ。実際問題、俺たち三人が束になってかかったところでテペウにゃあかなわねえ。テペウは『取り返しにきたって返す気はねえ』って言ってんだ。テペウが千宏をどう扱うにせよ、俺たちにはどうにかできる力がねえ」

「だからって放っておくのかよ！」

カアシュは叫んでテーブルを拳に叩きつけた。

「それでチヒロに何かあったらどうすんだよ。お前らそれで平気なのかよ！ 俺たち友達だったじゃねえか！ 護衛をやめたらそれっきりって　そんなの、まるでネコじゃねえか！」

「カアシュ！」

叫んだカアシュを、カブラは鋭く一喝する。

しかしカアシュは引き下がらず、鋭い眼光でカブラを睨んだ。

「俺は間違っただけぞカブラ。絶対にだ」

「いいやお前は間違ってる。いいか。テペウが名前を覚えるってのはな、そんなに簡単なことじゃねえ。テペウはチヒロに敬意を持って接するだろうよ。そんでチヒロがテペウの所にいるってんなら、心配する必要は皆無だ。そうだろうブルック」

ブルックは肩を竦める。

「だろうと俺は思うがな」

「だけど　！」

「俺たちじゃ釣り合わねえって。そういうことだカアシュ」

言い放たれたカブラの言葉に、カアシュは目を丸くする。

「間抜けだよなあ……俺達なんざいなくても、チヒロはなんの問題もねえんだよ。なのに俺は守ってやってる気になってよ……」

おだてられて、その気になって、千宏には自分達しかいないのだと、くだらない情熱を燃やしていたのが酷く馬鹿馬鹿しく思えた。

千宏は自力でハンスを手に入れた。ごめん、と。謝罪一つでカブラ達の護衛を捨て、今はテペウの元にいると言う。

「心配するのもおこがましいって話じゃねえか！ テペウが……っは！ そりゃあそうだよな！ チヒロはアカブが家族と認めた女だ。最初っからそうだったじゃねえか、あいつは俺達なんかよりよっぽど上等な存在だよ。そうだろうブ

ルック！」

「ああ……そうかもしれねえな」

自分達はアカブに叩きのめされて、チヒロの前に膝を折った。そうとも、最初からそうだったのだ。守ってやっているのではない、守らせていただいている立場だったのだ。

「もういい……たくさんだよ。こんなに惨めな気分は初めてだ」

たくさんだ、ともう一度繰り返して、カブラは目頭を覆って沈黙した。

昨夜の大雨が嘘のような快晴であった。

しかし森の地面はぬかるんで泥となり、増水した川が行く手を阻む。視界は霧に霞んで悪く、湿った空気は草の臭いばかりを運んで獣の痕跡をかき消していた。

カブラは忌々しげに舌打ちする。

ともかく拠点を作らねば話にならないが、いつも拠点としている場所は川の底に沈んでいた。

「ついてねえな」

呟いたカブラの肩を、ブルックが軽く叩く。

振り向くと、ブルックが少し先にある灌木の奥を指差した。一際目立つ木の枝に、明るい色の布が縛ってある。

「拠点か？」

「増水した川にびびって拠点を捨てて避難したんだろう。まずいな」

ああ、とカブラは舌打ちする。

先日森に入ったとき、この辺りに拠点を構えていたのはカブラ達だけだった。去年の狩りの時も、この辺りに拠点を構えていたパーティーはいない。

ということは、今期から新しく、この場に拠点を据えたパーティーが放棄した拠点である可能性が高かった。熟練のハンターが気まぐれに拠点を変えたのか、若いハンターの初陣かは分からない。だがもし後者だとしたら、非常にまずい。

「放置トラップか……見つけられるか？」

「難しいな。素人はやることに法則性が無い。しかも下手に隠匿技術だけ高い場合もあるからな」

そもそも、罠を張って獲物を捕らえるトラの狩りは、縄張りが非常に重要だった。普通、数日以内に拠点を敷いた痕跡がある場所には、後続のパーティーは拠点を置かない。でなければお互いの罠でお互いの命を危険に晒すことになるからだ。

そういったルールを知らないことから考えて、まず素人の仕業だろう。

「しかも霧で視界が悪い。霧が晴れて地面が乾くまでこの付近には近づかない方がいいだろうな」

言って、ブルックは周囲を見渡す。

「他の場所に拠点を張ろう。俺が先頭を歩く。カアシュは真ん中を歩け」

言って、ブルックはカアシュに振り返った。

カアシュの脚の防具は装甲が薄い。その上擦り切れて革も薄くなっているため、仮に狩猟用のトラップにかかった時にカアシュの防具では耐えられない可能性が高かった。

それにカアシュは三人の中で医療を主に担当している。医者に怪我をされるのが最も厄介であった。

カブラ達がいつも拠点としている場所はいくつかある。二つ目の拠点はここから近く、一日に二つの拠点を行き来する事も少なくない。先日森に入った時もそうである。

「なあ、遠回りしてかねえか」

荷物を担いで歩き出したブルックとカブラを、不意にカアシュは呼び止めた。

「……なんだいきなり」

不機嫌そうに訊ねたカブラに、カアシュは濁流を指差す。

「俺達の張ってた拠点から、放置された拠点の距離が近すぎる。それに昨日は大雨だったから、拠点を張ったとしたら三日前、俺達が森をでた直後だ」

そういやあ、とブルックが顎を撫でる。

「まあ、妙っちゃ妙だな」

しかしカブラは笑い飛ばした。

「おい、この森にいくつのパーティーが出入りしてると思ってんだ？ 同じ拠点を、複数のパーティーが順繰り使う事くらい珍しい話じゃねえ。それに俺達が拠点を置いてたのは素人目にもいい場所だ。別に妙な話なんかねえだろう」

それも確かにそうであった。

しかも森に入りたての素人は、暗黙のルールとは逆に、最近他人が拠点を張った場所にわざわざ拠点を置く事も少なくない。一日差で偶然近い場所に拠点を置いたからと言って、取り立てて妙な話では決して無い。

「けど……」

「うるせえな！ ネズミかてめえは！ 細けえこと気にしすぎなんだようざってえな！」

かっとなって怒鳴りつけると、カアシュも牙を剥いてカブラを睨む。

「なんだとてめえ……！ そもそもカブラが細かい事を気にしなすぎなんだよ！ ウシかてめえは！ てめえがそんな大雑把な性格だからいつも俺達は生傷がたえねえんだよ！ 力以外にも頭使えこの筋力馬鹿！」

「いいやがったなこの野郎……！ イヌ並みのチビのくせに偉そうに！ てめえ一人じゃなんにもできねえくせにデカい口叩いてんじゃねえ！」

「ああすぐそうやって体格を引き合いに出すんだよなお前は！ それ以外に自慢できるもん一個もねえもんな！ デカくて力が強いだけのトラなんざその辺にゴロゴロしてるんだよ！ トラップも組めねえ医学の知識も全くねえお前こそ、偉そうな口叩くんじゃねえ！」

「いい加減にしろ二人とも！ 早いとこ移動して拠点張らねえと日が暮れちまうぞ！ 太陽の位置を見る！ もうじき正午だ！」

怒鳴ったブルックの言葉を無視し、カブラはカアシュの喉首を締め上げると、力任せに木の幹へ叩き付けた。

「そうともよ、俺にゃあ力と体格しかねえ。だがお前にこれは死んでも手にはいらねえぞクソチビ。十年も本を読みあさりゃあ、知識なんざいくらでも手に入る。だがてめえは百年先も二百年先も貧相なチビのまんまだ」

「カブラ！ いい加減にしろ！ カアシュの言ってる事が正しい！ 大事を取って迂回すべきだ！」

「ああそうだな、臆病なチビのネコ野郎が側にいたんじゃ、そうするしかねえもんな！」

顔色を失って絶句したカアシュを泥の中へと放り捨て、カブラは忌々しげにツバを吐いた。

そのカブラの首元を、今度はブルックが締め上げる。

「カアシュに謝れ」

「っは……冗談だろう」

「カブラ！」

「もういい！」

ブルックの怒声を遮るように、叫んだのはカアシュだった。

泥で汚れた顔をめくって、カアシュはのろのろと立ち上がる。

「カブラの考えはよくわかった。俺は抜ける」

「カアシュ！ おいまでよ！」

引き止めたブルックを振り払い、カアシュはカブラを睨み付けた。

「カブラの言うとおり、俺はチビで臆病だ。俺よりでかくて力もあって、優秀な医者なんて腐るほどいる！ 俺はどう努力したってそういう奴にはなれねえさ！ 一生どこまでいったってチビのまんまだ！ だけど俺だってトラだ。俺にだって誇りがある」

「誇りだあ？ っは！ 欠片ほどの勇気もねえ癖に、口だけは一人前だな」

「てめえにはその勇気があんのかよ。テベウが怖くてチビ口を取り返しに行く勇気もねえくせに」

雄叫びを上げて、カブラはカアシュに殴りかかった。正面から顔面に拳をくらい、カアシュは再び泥の中に倒れ伏す。

「ああ分かったぜ！ お前が今まで俺みたいなチビと一緒にいた理由がよ！ 俺がお前より弱いからだ！ 喧嘩で必ず勝てる相手だから、てめえは俺をパーティーに入れたんだろう！ 違うか！」

「馬鹿にするんじゃねえ！ 誰がそんなつまんねえ理由で仲間になんかするか！ 哀れだと思ったんだよ！ てめえみてえなチビがよ！ けなげにハンターなんざやってんだ！ あんまり惨めで泣けてきたから誘ってやったんだ！」

「大きなお世話なんだよ！ 俺はお前なんかと組まなくて、他の種族と組めばそれで十分だった！ てめえといた百年の方が、俺にとっちゃよっぽど惨めだったんだよ！」

叫んで、カアシュもカブラに殴りかかる。しかしやすやすと殴り返され木に激突し、カアシュは血を吐き出した。

最早ブルックには手をつけられなかった。

殴りあいながら二人は地面を転がり、灌木をなぎ倒し、猛獣のごとく暴れまわって止まらない。

気がつくと二人は川に沈んだ拠点を離れ、第二拠点へと向かう細い道で殴り合っていた。打ち払われた木々が長く続き、むき出しのぬかるんだ地面が細く延びている。

その道の真ん中で、カブラは頭上にカアシュの首を掲げるようにして怒鳴った。カアシュの足は地を離れ、完全に浮いている。

「抜けるってんなら勝手にしやがれ！ てめえのケツ持つのもこれで最後だと思うとせいせいするぜ！」

「ふざけんなよ……！ てめえにケツなんざ持ってもらった記憶これっばかしもねえんだよ！」

すでに血まみれのカアシュに対して、カブラは僅かに口を切った程度でほとんど無傷であった。それほどに、カアシュはトラとしては弱い。

それでもカアシュを仲間にした理由を、カブラは忘れた事など一度も無かった。

まだ若く、森のこともろくに知らなかった百年前に、カブラは森でカアシュと出合った。即席のパーティーの一員同士

としてである。

カブラのミスでカアシュと共に崖に落ち、カブラは脚を致命的に負傷した。それこそ、完全に一人では立てない程に重症だったのだ。

カアシュは一言もカブラを責めなかった。「俺もよくヘマするから」と陽気に笑い、歩けないカブラに肩を貸して延々五日も共に歩いてくれた。

だが、カアシュはハンターの中では笑いものだった。雑用として連れて行く以外の価値は無いとさえ公言された。小さく弱いと言う事は、トラの中ではそれほどに致命的なことなのだ。

カブラはカアシュの首を捕らえた手に力を込める。この手を放せば、それで終わりだ。

そして、カブラはカアシュの体を荒々しく地面へと放り出した。ぬかるみへと叩きつけられ、カアシュは低く呻いて這うように起き上がる。

ふらふらとよろけるカアシュに背を向けようとし、カブラは愕然として振り返った。カアシュの足元で今、何か

「よせカアシュ！ 動くな！」

叫んだ瞬間、鋭い金属音が森に響いた。血飛沫に一拍遅れて、カアシュの絶叫が木々を揺るがす。

金属の牙がぬかるみから飛び出し、脚の装甲を砕いてカアシュの脚に深くと食い込んでいた。猛獣を捕らえるのに使う罟である。だが何故、明らかに人が行き来するだろうことが見て取れる“道”の真ん中に。

不意に、火薬の臭いが鼻を掠めた。金属の牙で獲物を捕らえ、後に爆薬で脚を破壊する罟が存在する事を、知らない二人ではない。カブラとカアシュは愕然と視線を交わし、叫んだのは同時だった。

「カアシュ！」

「来るなカブラ！ おまえも巻き込まれる！」

瞬間、爆音が轟いた。泥が飛び散り、つぶてのように飛んでくる。顔にへばりついた泥を拭おうとして、カブラは凍りついた。

これは、この色の塊は、

肉片では、ないのか。

カブラはよろめいて後退し、異変を察したブルックが駆けて来る。

「カアシュ！ 何があったカブラ！ おいカアシュ！」

もうもうと立ち込める煙の中に飛び込んで、ブルックは繰り返しかアシュの名を呼んだ。

気がついてみれば周囲には、いくつもの罟がある。

どうして、

カブラは膝をついた。

ブルックに助け起こされたカアシュの左足が、無い。

「手を貸せカブラ！ 街に運ぶぞ！」

叫んで、ブルックはカアシュの足の付け根をきつく縛った。

それをただ呆然と眺めるばかりで、カブラは指一本動かさない。

「カブラ！ ぼさっとするんじゃねえ！ てめえなんのためにそんな図体してんだ！」

怒鳴りつけられ、はっとする。

カブラは立ち上がるなりカアシュを一人で担ぎ上げ、ブルックの先導に従って走り出した。トラップの有無を判断する目は、ブルックが最も秀でている。

「トラ狩りだ、ちくしょう！」

ブルックが忌々しげに罵った。

トラを殺して許可証を奪い、なりすましに利用する遺跡荒らしは少なくない。

しかしトラと正面からやりあっても返り討ちにされる可能性が非常に高いため、犯罪者達はトラを殺すために様々な策を弄した。

増水した川に沈んだ拠点。その側にわざとらしく設置された、うち捨てられた真新しい拠点。

その状態にあれば、誰だろうと第二の拠点を目指すだろう。カブラ達は先日から第二の拠点と第一の拠点を行き来しており、その道筋を第三者が知ろうと思えばいくらでも調べられる。

罟を仕掛けるのは容易かった。

気付くべきだった。気付けるはずだった。事実、カアシュは気がついていて。

「カアシュ、死ぬな……！ 死ぬなよ……頼むから……！」

頼むから、とカブラは何度も繰り返した。

ここから街まで、全力で走れば半日もかからない。そうすれば森の入り口で、待機している医師隊の治療が受けられる。

「ちくしょう、ちくしょう……！」

走っている間にも、ぐちゃぐちゃに崩れたカアシュの脚の断面からは、絶え間なく血液が流れ落ちて行く。

「よし抜けたぞ！ ここからは大丈夫だ！」

ブルックが言った瞬間、カブラは一層速く森を駆けた。先ほどまで前を走っていたブルックが、もう遙か後方を走っている。

絶対に助ける。絶対に

カブラは大量の血液を失って冷たくなっていくカアシュの体に怯えながら、祈りのようにそう繰り返した。

テペウに半ば誘拐され、それを追ってきたと思しきハンスが恐ろしく間抜けな登場を果たした翌日の朝である。

夜から現在に至るまでのハンスの異常な落ち込みようは、最早精神で物理現象を引き起こすレベルにまで達しようとしていた。ハンスの周囲一体が妙に重く、そして暗い。湿度過剰で今にも毛皮からカビが生えそうなハンスを連れて、千宏はすっかり朝食をご馳走になってから穏やかにテペウの宿を辞した。

からりと晴れて青々と抜ける空は、それだけで気分がいいものだ。

一人湿り気を背負って歩くハンスの存在を視界の外に追いやりながら、千宏は清々しさを胸いっぱい吸い込んで空を見上げた。

「思ってたよりずーっといい人だったなあ」

誰かに同意を求めるでもなく、しみじみと呟く。

その千宏の呟きで、ハンスが一層暗く重たく沈みこんでしまったことに、千宏はあえて気付かないふりをした。

微妙に浮き足立った雰囲気のある街で、千宏はイーグキャリッジを拾ってトゥルムの待つ宿へ向かった。

朝から晩まで元気に走りまわるこの巨大な虫の存在に、千宏はほぼ慣れてしまっていた。何せ本当に、どこに行っても必ず出くわす驚異の遭遇率なのだ。慣れなければやっていられないと言うのが本当の所である。一度などは餌をねだって頭をこすり付けられたが、なんとなく可愛く思えてきた今ならば、手から餌を与えることも可能だろう。

どンドンヒト離れして行く自分を少々悲しく思いながらも、トラに近づいていると思ひこむことで自分を騙す千宏である。

「ただいまおじさん」

相変わらずこ汚い宿の扉をくぐり、カウンターでだらしなく雑誌を捲っていたトゥルムに声をかける。

するとトゥルムはぎょっとしたように目を見開き、半ば叫ぶようにしていった。

「あれ？ 姐さん、診療所にいったんじゃなかったんすか！ 俺あ、帰ってこねえからてっきりそっちに行ったんだと……」

「診療所……？ なんであたしが」

「だってあのチビが……」

「カアシュが？」

トゥルムがいよいよ顎を落とす。

「あの……姐さん、きいてねえんでございましたら、その……」

いったん言葉を切って雑誌を閉じ、トゥルムは立ち上がると改めて千宏を見た。

「今朝、森で負傷したハンター専門の診療所に運びこまれたらしいんでさ。トラップにひかかっちゃったらしくて……」

千宏は目を見開いた。

「トラップって……カアシュが？ 運びこまれたって、怪我したってこと？」

「……足を爆薬で吹っ飛ばされたって聞きやした」

千宏は一瞬息を止めた。

よく、意味が理解できなかった。

つまりそれは、一体どういうことなのか。

「チヒロ」

ハンスに呼ばれて、千宏はようやく我に返る。

「いかなきゃ」

それだけ言って、千宏はすぐさま踵を返し、たった今くぐったばかりの門から再び道へと飛び出した。

飛び込んだ診療所には、多くのトラ達がごった返し、息苦しくなるような臭気が充満していた。

どのトラたちも血や泥でひどく汚れ、ずらりと並んだ粗末なベッドにはあらゆる種所負傷者が横たわっている。忙しげに走り回る医者と思しきトラの女を捕まえて、千宏はカアシュの居場所を早口に尋ねた。

「ああ、あの小さい……」

言って、女は表情を曇らせる。

「その扉の奥にいるけど……あれはどうにもならないわ。ウサギかネコの王族が、気まぐれでトンデモ魔法でも開発しない限り、彼は一生片足よ」

手短に絶望的な状況を千宏に伝え、女はまた忙しそうにかけて行く。千宏はしばし立ちすくみ、しかしすぐに指し示された扉へと歩み寄った。

ノブを捻り、ゆっくりとドアを押し開ける。

中は恐ろしく静かだった。あまりにも、無音だったため、部屋を間違えたかと思うほどである。しかし部屋の中に入ってみると、果たしてそこにはカアシュがいた。

簡素なベッドに横たわり、眠っているのかぴくりとも動かない。

腰から下には清潔な毛布がかかけられていたが、それでもはっきりと見て取れた。

無かった。左足の膝から下が、跡形もなく、完全に。

「……カアシュ」

声を上げると、ベッドとは違う所で身じろぎする気配がした。

「来たのか……おまえら」

ソファで静かに俯いていたのは、憔悴した様子のブルックだった。部屋に、他の誰かの姿は無い。

「カブラは……？」

ブルックは首を振る。それが何を意図しての仕草だったのか千宏には分からなかったが、千宏はそれ以上何も聞かずにカアシュへと歩み寄った。ハンスは静かにドアを閉め、その横の壁にもたれて立っている。

千宏は、何を言ったらいいのかわからず、ただ黙ってカアシュを見ていた。

傍らには、酷く痛んでぼろぼろになった足の装具が無造作に置いてある。

ふと、思う事があった。

もしあの日、千宏がハンスを捨ててカブラ達を選んでいたら、カアシュはこの古い装具を捨て、千宏が贈った新品を装備して森に入っていたのだろうか。

そうしたら少しは、ほんの少しは、足の怪我も今よりはマシに済んだのだろうか。

「そいつは、今期の狩りじゃおまえにもらった防具をつける気は無かったぜ」

千宏の考えを読んだように、ブルックが唐突に言う。

振り返ると、ブルックは苦笑いのような笑みを浮かべて見せた。

「折角もらったんだから、汚したくないってよ」

「……そっか」

「ああ」

「死んだり……しないんだよね」

ブルックは目を伏せる。

「どうだろうな」

千宏は目を見開いた。

「それって……どういう……」

「カアシュはもう戦えねえ。まともに走る事もできねえ」

言って、ブルックは奥歯を噛み締める。

「終わりだ。カアシュはハンターを続けられねえ」

「……でも、生きてる」

ブルックは失笑した。

「カアシュはハンターだ。ずっとハンターだった。チビのくせによ、大人しく船乗りでもやってりゃ良かったのに、それでもずっとハンターを続けてた。お前にゃその理由がわからねえだろうな。カアシュはハンターをやってなきゃいけないかったんだ」

「なにそれ……わかんないよ。なんで？ だって他にも仕事は……」

「それがカアシュの誇りだったからだ」

千宏は眉をひそめて首を振る。

ブルックが何を言っているのか分からなかった。

「カアシュはチビで、トラとしちゃあ笑っちゃうくらい弱い。そんな奴がハンターになんざなれるわけねえってな、誰だってそう思う。それで言うんだ、『船乗りになんざなれよカアシュ。狭い船の中だったらチビにだって仕事がある』ってな」

「それは……」

「当たり前だって思うか。そうだろうな。事実そうだ。トラだってなにも、全部が全部ハンターやってるわけじゃねえ。血を見ただけで気絶するトラだっているくらいだ。だけどな、そいつらだって全部自分で仕事を選んでは。例え妥協の結果だろうと、それでいいって自分が納得して選んだ仕事だ」

お前には無理だと馬鹿にされ、臆病なチビだと侮られ、

「最初から無理だって決めつけられて、やりもせず引くのはトラじゃねえ。カアシュはハンターであることを選んだ。チビだなんだとこけにされても、それでもハンターでい続ける事を選んだ。それがカアシュの誇りだ。ハンターをやってるってその事実が、カアシュの誇りの全てだ」

「そんなの……！」

「馬鹿げてるか？ ああ、よく言われる。だが俺はそんなカアシュを誇りに思う。だから俺達と一緒にいた。なあチビ口。チビで臆病なトラがよ、片足までぶっとばされてこれからどうやって生きてくよ。生きて行くだけならできるだろうが、誇りはどうなる。先に言っておくぞチビ口。カアシュが目覚まして、それで『生きていただけ感謝しろ』なんてつまんねえこと言いやがったら、俺は絶対にお前を許さねえ」

それきりブルックは沈黙し、部屋には再び静寂が満ちた。

ハンターであること。戦士であること。ただ生きる事よりも大切な、トラとしての誇り。

誇りがなければ、生きられない。

荒々しく扉が開いたのはその時だった。

「出発だブルック！ カキシヤがネコと話をつけた」

ぎょっとして振り返った千宏の瞳と、カブラの青く透き通った瞳がぶつかる。

怒鳴られるかなにかするだろうと予想して、千宏は咄嗟に反論の言葉を探した。

だが、カブラはすいと千宏から視線を逸らし、小さく纏められた三人分の荷物を床に放ってブルックを見る。

「見つかったか。さすがカキシヤだ！」

嬉しそうに破顔して、ブルックも立ち上がる。

それから、カブラは真っ直ぐに千宏に歩み寄り、丁度正面で立ち止まって静かに千宏を見下ろした。

「あの……」

「どけ。邪魔だ」

静かな、だが決定的な拒絶の言葉だった。

凍りついた千宏を横に押し分け、カブラはカアシュの体を担ぎ上げる。

「二時間後に船が出る。もたもたしてる暇はねえぞ。結構な長旅になるからな」

「よし、おまえはカアシュを連れて先に港に向かえ。俺も最低限の物だけ揃えてすぐおいつく」

まるで、千宏など存在していないかのように振舞う二人に、千宏は表情を強張らせて立ち尽くした。

「まってよ……」

こんな扱い、酷いではないか。

確かに自分は、カブラ達を裏切った。だが、それでも

「ねえ、ちょっと待ってよ！ あたしだってカアシュの友達なんだ。船ってどういうこと？ どこかに行くって、そういうこと？ だったらあたしも」

「おまえには関係ねえ」

言い放って、カブラは千宏に背を向け、ハンスの横を素通りして部屋を出る。後に続いたブルックの後姿を見送って、千宏は震える唇を噛み締めた。

それから、どれくらいの間そうしていただろうか。黙って待つことに慣れきったハンスが痺れをきらし、もたせ掛けていた背を壁から離す。

「……チビ口。帰ろう」

言って、ハンスが静かに千宏を促す。

しかし千宏はきつとハンスを睨みつけ、そして再び、トゥルムの宿を飛び出した時と同じように駆け出した。

「チビ口！」

「テペウのどこに行く！」

「なんだと？」

愕然と聞き返したハンスを無視し、千宏は再びイクキャリッジに飛び乗った。

カキシヤがネコと話をつけた。そう、カブラは確かに言っていた。

ならばカキシャに訊けば大体の事が分かるだろう。そして現在、千宏が頼れるトラはただ一人。そしてその男は恐らく、この街で誰よりも頼りになる人物だった。

「ブラウカッツェよ。義肢職人に話をつけたの」

探してもらう手間もなく、千宏がテペウの部屋に飛び込むと、果たしてそこにはカキシャがいた。

丁度カブラ達のことを話していた所らしく、千宏は首尾よく情報を得ることに成功したのである。

「ネコの国ってすごーく広いのよ。で、技術だってどの国よりもぶっちぎり。だから職人の質ってピンキリなのよね。腕っていうか、性格的な意味でね。なんでもいいからって適当な義肢職人を選ぶと、ほんととんでもないことになるんだから。例えば、義肢を作りについて逆に義肢の材料にされちゃうとか」

実に恐ろしい話である。

千宏もあのささやかな市場でネコとは何度か接触したが、どうやらあれでそれなりに善良な部類だったらしい。

「で、その職人を選んで仲介してるのがあたしてわけ。トラって本当にネコと相性悪いから、仲介するのって結構な骨なのよ？ その点あたしはネコなんか遅れを取らないほどかしこい美人さんだから、怪我をしたトラの戦士に抜群の職人を紹介できるってわけ」

「それで……そのブラウカッツェっていうのには、どうやったらいけるの？」

簡単よお、とカキシャは笑う。

「今から一時間後にでる大型船にひらりと飛び乗って、三日間ゆらゆら揺られてれば眠ってても到着、港町だからね。なあに、もしかして追っかけていくつもりなの？」

「そりゃ、急いだ方がいいな。ネコの国に向かう船は、今日を逃すと次は一週間後だ」

テペウが瓶の中の酒を飲み干しながら口を挟む。

そんな、と千宏は立ち上がった。

「困るよ！ だって、荷物は全部宿に置いてあるのに……！」

今から戻って荷造りをしていたのでは、とても一時間後の出向に間に合わない。

千宏が叫ぶと、テペウは何かを思い出したように声を上げた。

「宿っていやあ、そうか。お前らはトゥルムのとこに泊まってんだっただ」

「あら、じゃ好都合じゃない」

カキシャも笑って、のんびりとグラスを傾ける。

どういうことかと首をかしげる、千宏に、テペウは愉快そうに笑って見せた。

「渡りに船たあよくいったもんだな。あいつは元々船乗りだ。今じゃ宿屋の真似事なんざやってるが、この街じゃ船の出ない時期に海に出たきゃまずトゥルムに声をかける」

「うっそ！ あのおじさんが！？」

思わず叫んだ千宏の態度に、カキシャが声を上げて笑う。

「あんな薄汚い宿屋だけで、食べていけるわけ無いじゃない。あいつにとって宿屋は釣り場よ。なにも知らない他種族の女を部屋に泊めてお楽しみするためのね。いわば完全に趣味の領域。お金だけは無駄にもってんのよ。がめついから」

千宏は愕然と顎を落とした。なるほど、道理で気軽に改装だなんだと決意できるわけである。

「それじゃ、出発までゆーっくりと、お姉さんがネコの国について教えてあげるわ。感謝してよね、チヒロちゃん」

妖艶に笑ったカキシャの言葉に、千宏は笑顔さえ浮かべて頷く。

そして一路はネコの国最大の港町　ブラウカッツェを目指して遺跡の街を後にした。

[前へ](#) [次へ](#)